

公益財団法人 笹川記念保健協力財団
理事長 喜多悦子 殿

神戸市灘区土山町5番1号
国家公務員共済組合連合会六甲病院

院長 笹田明德



1. 研究・研修事業 2013年度 ホスピス緩和ケアドクター研修助成事業

2. 期 間 2013年 4月 1日 ～ 2014年 3月31日

3. 報 告 書

I 事業の目的・方法

II 内容・実施経過

III 成果
(上記Ⅰ～ⅢをA4縦・横書 6,000字程度にまとめる)

IV 収支報告
①助成金の使途(人件費以外は領収書等の証憑書類を添付)
②当該助成金に関わる部分の決算書「写」
(貴機関の全会計決算書ではなく、当該助成計上部分のみで可)
※決算期の関係で2014年3月17日(月)までに「写」を提出できないときは提出予定日を記入
(提出予定日 2014年 7月 末日)

V 研修修了者報告書

以上

平成 25 年度ホスピス緩和ケアドクター研修助成事業に係る報告書

六甲病院緩和ケア科 部長

安保博文

I. 事業の目的・方法

全国で緩和ケア病棟・緩和ケアチームの設立が続く中で、緩和医療に従事する熟練した医師の養成が必要とされている。六甲病院緩和ケア病棟では、平成 6 年 10 月に開設以来の診療・ケアの実績・経験を生かして、平成 11 年以降、多くの医師の研修を受け入れてきた。平成 15 年度からは、笹川医学医療研究財団（現 笹川記念保健協力財団）によるホスピスドクター養成研究事業の助成を受け、将来緩和医療に携わることを希望する医師を受け入れて 1 年間の長期研修を行っている。

研修の目的および方法の概要は下記の通りである。

<研修の目的>

緩和ケアの基本理念を理解し、実践を通して緩和ケアに必要な知識、技術、態度を習得することを目的とする。特に医師として以下の点に重点をおく。

- ・ 個々の患者や家族のニーズを的確に把握し、単に医学的に正しいと思うことを強制することなく、患者の身体的および精神的な症状のコントロールと家族のケアを行えること。
- ・ チームアプローチの実践を学び、ホスピス緩和ケアチームの中での医師の役割を考えて行動できること。
- ・ 医師として常に最新の医学知識を把握するよう努力することが緩和ケアにおいても重要であることを理解し行動すること。

<研修スケジュール>

- 1 ヶ月目 : 緩和ケア専任医師とともに行動し、副主治医として患者を担当し、治療・ケアの方法を学ぶ。
- 2 ヶ月目以降 : 主治医として患者を担当し、副主治医となる緩和ケア専任医師のアドバイスを受けながら治療・ケアを行い、実践を通して学ぶ。

<学会・研究会への参加>

- ・ 日本緩和医療学会、死の臨床研究会、兵庫緩和ケア研究会などに参加し、新しい治療やケアの方法を学び、また他施設のスタッフと交流を深める。

<他施設での研修>

- ・ 六甲病院以外での緩和ケア施設での研修を行い、他施設の診療内容やケアの取り組みを学ぶ。

<研修レポート>

- ・ 6 ヶ月を経過した時点で半期研修レポートを作成し、半年間で達成できたことの振り返りと今後の課題の明確化を行う。
- ・ 平成 26 年 3 月にまとめの研修レポートを作成し、笹川記念保健協力財団に

提出する。

Ⅱ. 内容・実施経過

平成 25 年度のホスピスドクター養成の研修医は、香川大学医学部卒業後 6 年目となる中島綾花医師を採用した。中島医師は、初期研修終了後内科の後期研修を受けられたあと、平成 24 年 7 月からは高松平和病院で緩和ケア科での研修を開始されている。

当院での研修は下記のように行った。

1 ヶ月目（平成 25 年 4 月）は、副主治医として主治医である上級医と共に診療を担当し、主治医が行う入院時の面談や治療方針の決定方法を学んでもらった。

2 ヶ月目（平成 25 年 5 月）以降は主治医として診療を担当した。入院当日、プライマリナースとともに患者さんおよび家族との面談・診察を行うことから始まり、症状コントロールについては上級医との相談により治療方針を決め、患者さん・ご家族の全体の問題については毎日のカンファレンスで他のスタッフと共有し、チームとして治療やケアをすすめる形での研修を行った。

平成 25 年 5 月より平成 26 年 3 月上旬までに、中島医師は主治医として 56 名の緩和ケア病棟入院患者の診療を行った。

院外研修として、平成 25 年 11 月に聖路加国際病院緩和ケア科にて研修を行った。さらに、この報告書の作成後となるが、平成 26 年 3 月下旬には在宅緩和ケアを専門とされている関本クリニックでの短期研修も予定している。

また、平成 25 年 11 月に開催された第 37 回日本死の臨床研究会に病棟スタッフとともに参加したほか、地元で開催されている兵庫緩和ケア研究会などにも参加し、緩和ケアに関する研鑽を深める機会に積極的に参加してもらった。

Ⅲ. 成果

中島医師はまだ卒業後 6 年目であり、医師としての経験は長いとはいえない。しかし、研修当初より、患者及びご家族への接し方、全人的な配慮、病状の評価などについては、医師として必要な技術・見識と所作をすでに身につけておられ、病棟の看護スタッフからも安心して見ていられる、との評価を得ていた。主治医として、大量のオピオイドを必要とする疼痛コントロールの難しい患者さんや、入院後急速に病状悪化する患者さんなども多く受け持っていたが、私達指導医や他の病棟スタッフとも良いコミュニケーションをとり、難しい状況においても落ち着いてケアを行われていた。また、メサドンなどの新しい薬剤の処方や副作用管理も行い、症状緩和に関する薬物使用等に関する専門的な知識と技術の習得も行うことができたと考える。

来年度以降は高松平和病院に勤務しつつ、日本緩和医療学会の専門医の取得も目指す予定である。